

関西大学教授

**外国では「違い」ばかりでなく、「同じもの」を見つけることも大事。心の中に架け橋をつくる気持ちがあれば、国際交流は難しくない。**



**プロフィール**

1941年アメリカ、イリノイ州生まれ。インディアナ州立大学（生物）、インディアナ州立大学院前期課程（演劇）、ウェイン州立大学後期課程（演劇）卒業。博士論文は日本の伝統芸能の能楽について。1975年来日。1976年より関西大学文学部英文科にて教鞭を執る。現関西大学国際交流センター所長代理、外国語教育研究機構教授。滋賀県大津市在住。

ガル語もあるし、中国語もあるし、英語もある。滋賀県は田舎でも国際的ですよ。

でも、心配な面もあります。例えば、お隣さんが違う国から来たから、考え方が分からない。最初から「考え方が分からないと思うこと」は、自分でつくったバリケードだと思うんです。声を掛けても言葉が通じないからアドバイスできないかな（笑）。ケース・バイ・ケースですけどね。

日本には町内会がありますから、地元でトラブルになりそうなことは相談できる。その点は、アメリカとは違うんですね。アメリカには町内会がないから、すべて個人の責任になります。だから、時々問題は多くなる。

逆に、アメリカの学校カウンセラーのシステムはすごくいい。精神的なトラブルや言葉の問題があればカウンセラーが対応します。日本でもカウンセラーは少しずつ多くなっていますが、アメリカの学校カウンセラーはもっと強い立場です。家庭裁判の関係、警察関係、医学関係、専門の心理学カウンセラーの集まりもある。だからいろんなことができる。でも、日本の場合、例えば日本人が外国語に対してどうするか。教員はポルトガル語ができない。ですから、特別教室をつくる等の対応が必要です。これが現在の日本では進んでいないように思えます。例えば、工場の近くに暮らしている外国人は、ブラジルからの家族が多いわけですから。その地域の小学校は言葉という大きい問題があるかもしれない。隣の小学校にはない言葉の問題が。ですから、滋賀県の教育委員会は、すべてを平等に考えようと思ったら駄目だと思います。特別に地域で問題があれば、特別教師は必要かもしれない。

**滋賀県の人にメッセージをお願いします。**

県民の中にも外国人がいる。だから、「外国人は違う」ということより、「外国人と一緒に暮らそう」と考えて欲しい。

そして先ほどから何度も出てきますバリケードをなくして欲しい。出島は、外国人のためのところですよ。日本人の心の中に出島があれば、もう何もできないんです。けれど、古い地図を見たら、出島も橋があったんです。架け橋は大事なもの。心の中に架け橋をつくる気持ちがあれば、国際交流は難しくないんですね。

**来日されたきっかけを教えてくださいませんか。**

私のアメリカの友人が、枚方のパナソニックで英語の教師をしていました。その友人の話によると、松下電器は能楽部、お茶の稽古場、お花の稽古場などがありました。ハイテク産業の松下電器社員は、伝統的なことも仕事場でやっているんです。新しいことはよく取り入れるけれど、新しいことを取り入れれば、古いことはすぐ捨てる、というアメリカと違って日本はハイテクな面と伝統を守る面があるから面白そうだと思います。

それで興味を持って、最初は1、2年のつもりでしたが、いつのまにか30年も経ってしまいました。

**今、日本で外国語がとても重要視されていますが、先生の授業ではどのように外国語能力を高めておられますか。**

学生のニーズで、日常生活の英会話とか、ビジネス英語は文学作品より大事という考えが強くなってきました。そこで、数年前、関西大学の中で新しい学部をつくりました。外国語教育研究機構といいます。そこでは、英語だけでなく、フランス語、ドイツ語、韓国語、中国語、また留学生のための日本語の授業も行います。いろんなレベルのクラスをつくりました。

この30年の期間で、外国に行くチャンスは多くなりました。高校生の修学旅行も、昔はだいたい京都でしたが、今はアメリカやヨーロッパに行く学校もあります。ある学生と話したら、「アメリカのホームステイに行って、3週間親切な家族と一緒に暮らしたけれど、聞き取りが足りなかったから、何も言えなかった。恥ずかしい思いをした。」というのです。「同じ様にならないように勉強が必要。もう1回アメリカに行きたい!オーストラリアに行きたい!そのときにだれと話しても通じるようになりたい!」という目的があれば、学生はよく勉強するんですよ。

また、仕事で、外国に暮らす可能性も多く

なっているでしょう? 実際、旅行だけでなく、外国で暮らしたい学生は多くなっているんです。私と同じように1~2年だけかもしれないけど、どこかの違う国で暮らしたい。だから、心の準備は大切です。

**外国に出ていく前に、日本でできる異文化に対する心の準備というのは何がありますか。**

私は、文化が違って人間には同じものが山ほどあると思います。違う国に行くのですから、違う文化、違う食事など、「違い」ばかりを考えながらその国に行くのはだめだと思います。例えば、ホームステイ先の家族と4週間一緒に暮らして、子どもの兄弟げんかとか、ペットが欲しいけれどマンション生活だからできない、などの家庭の話聞いて、言葉は違うけれど日常生活の問題は同じじゃないか、そういうことを見つけることも大事です。日本のテレビでも、文化が違う、言葉が全然違うという言葉をよく聞きますが、それが心のバリケードになるかもしれない。そのバリケードを壊すだけでも十分だと思います。

**先生が日本に来られたとき、何かバリケードに感じられたことはありましたか。**

やっぱり言葉の難しいこと。例えば敬語の使い方。英語は文章の頭で、「please」をつけたら丁寧語になりますからすごく簡単です。今でも、時々どこかの大会社の社長と会ったら、私のほうが年上、でも相手は大会社の社長、となると、どっちが上、どっちが下という判断は難しいです。

**滋賀県に住んでおられる外国人の方がバリケードに感じておられる面がたくさんあると思うのですが、何かアドバイスはありますか。**

数年前、大津市のお店に買い物に行って、帰りに駐車場の警備員が「オブリガード」と言いました。私は「えっ?」と（笑）。まさかポルトガル語が出るとは思わなかった。守山の運転免許センターに国際免許証を取りに行ったら、看板はハングルもあるし、ポルト